

人々の命を守るという仕事



からせいのNEWSLINE

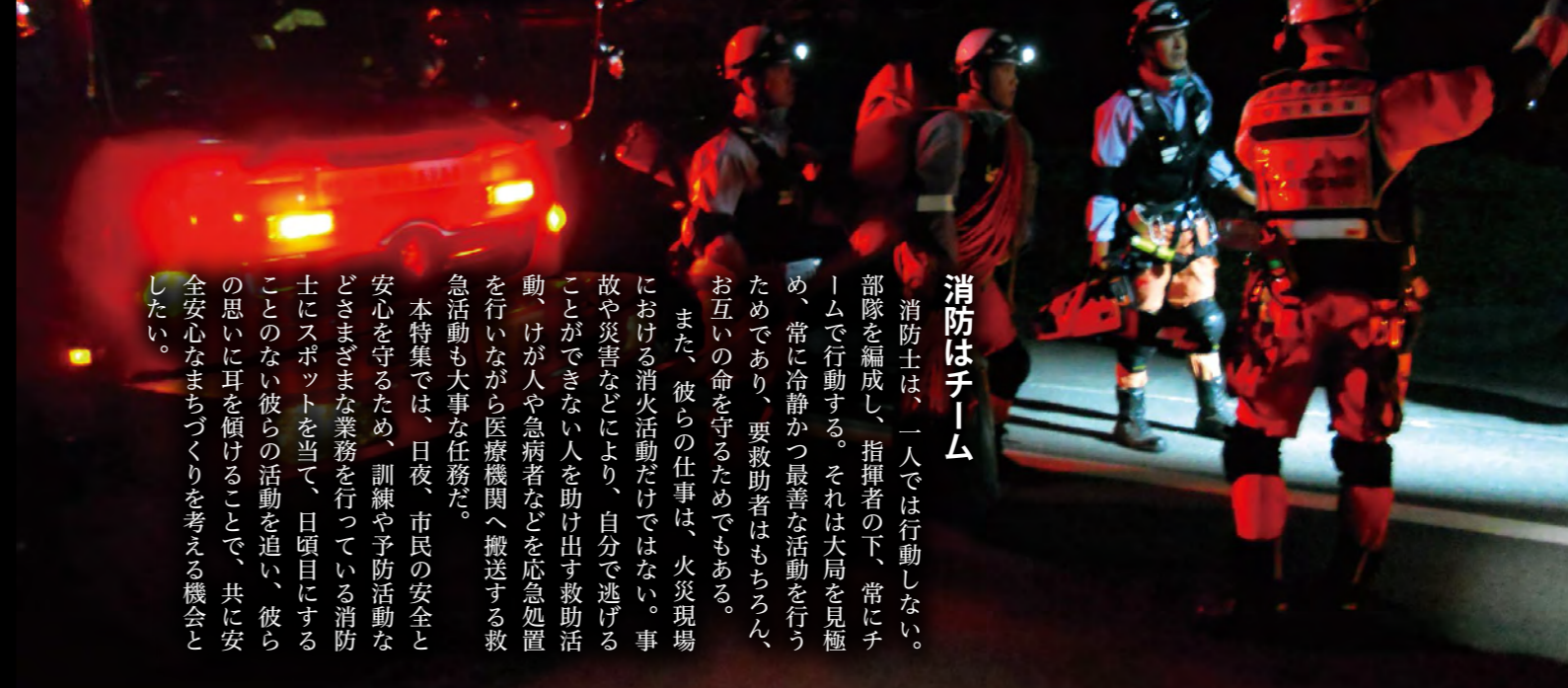
私たちが暮らすまち薩摩川内市。このまちで私たちの生命と財産を守るため、いつも見守ってくれている目がある。

私たちが仕事をしているとき、眠っているとき、そして今この時も、24時間体制でまちを見守りながら、出場（出動ではなく、現場に赴くという意味で出場と呼ぶ）を要する事象の際には、素早く現場に駆け付け、常に危険と隣り合わせで、消火、救助、救急活動などを行う。それが消防士であり、その組織が消防局だ。

組織としての消防

消防局は、消防本部と消防署の大きく2つの組織に分かれている。さらに消防本部は、予算、人事、消防機材や施設の整備などを担当する①消防総務課、消防局、消防団の現場活動における調整および訓練を企画立案する②警防課、火災の原因調査や事業者などの防火管理状況および危険物施設の規制を行う③予防課、119番の通報受理や出場指令を統括する④通信指令課の4つに分かれている。

また、現場活動を展開する職員が所属する消防署は、中央・東部・西部消防署の3つに大きく分かれ、さらに南部・祁答院分署と上観・下観分駐所がある。



消防はチーム

消防士は、一人では行動しない。部隊を編成し、指揮者の下、常にチームで行動する。それは大局を見極め、常に冷静かつ最善な活動を行うためであり、要救助者はもちろん、お互いの命を守るためでもある。

また、彼らの仕事は、火災現場における消火活動だけではない。事故や災害などにより、自分で逃げる事ができない人を助け出す救助活動、けが人や急病者などを応急処置を行いながら医療機関へ搬送する救急活動も大事な任務だ。

本特集では、日夜、市民の安全と安心を守るため、訓練や予防活動などさまざまな業務を行っている消防士にスポットを当て、日頃目にする事のない彼らの活動を追い、彼らの思いに耳を傾けることで、共に安全安心なまちづくりを考える機会としたい。

緊急通報

消防署内に緊張が走る

一秒でも早く現場へ

消防士は24時間の交代勤務。緊急通報時に一秒でも早く現場に急行できるように車両・機材の点検、訓練などを行う。現場の状況はさまざまであるが、どんなに過酷な現場にも耐えられるよう、トレーニングや訓練には多くの時間を割き、強靱な肉体をつくりあげている。



1 4 さまざまな状況を想定した訓練
2 体力トレーニング 3 車両・機材の点検

火災の緊急通報 (119番通報)



▲通信指令室へ緊急通報が入る

火災の被害を最小限に抑える。それが消防士の任務だ。火災の119番通報が通信指令室に入り、発生場所、火災の概要が分かる。ただちに、署内に指令が鳴り響く。素早く階段を駆け降り、出場準備室で防火服に着替えながら、指令室から送られてくる現場の位置情報をモニターで確認。その後、消防車に乗り込み出場する。指令が鳴ってからここまでわずか1分。

現場に向かう全車両で無線が飛び交い、活動指針を共有する。そして現場に到着すると火災の被害を食い止めるために確実、迅速に状況に合わせた活動を行う。



▶事務室から階段を駆け降りる

▼防火服に着替えながらモニターで現場の位置情報を確認



出場



消防局の日常

出場がない日も、当然彼らは休んでいるわけではない。
事務処理、予防査察などの通常業務、日々の訓練やトレーニングも欠かせない。また、住民と一体となった避難訓練や救命講習、火災予防イベントなどの啓発活動も大切な仕事である。
地域や子どもたちとの触れ合いにも積極的で、祁答院中学校の生徒たちが、祁答院分署の防水壁画のリニューアルで郷土愛に満ちた防水壁画を完成させてくれたことなど、さまざまなことに取り組んでいる。



▲救急の日「集団救急事故訓練」



▲訓練中の1枚



▲完成した祁答院分署の防水壁画と生徒たち



▲壁画には制作した4人の名前も

暮らしを守る消防車両たち

●救助 44 件

●救急 4330 件

●火災 39 件

平成30年出場回数

水槽付き消防ポンプ自動車

通称タンク車と呼ばれる車両で、2,000リットルの水を積むことが可能で、水利(消火栓、防火水槽、自然水利の川、池、海、プールなど)がなくても、火災現場に到着してからの迅速な消火活動が可能。



救助工作車

さまざまな事故や災害の現場で救助活動に対応するため、ウインチ、油圧発生装置、夜間活動のための照明装置などを装備し、重量物排除器具や切断用器具(交通事故などで扉の開閉や切断などに使用)などを積載している。



はしご付き消防自動車

中高層建築物の消火、救助活動を行うための車両で、地上35メートル(ビルの10階建て相当)まではしごを伸ばすことができ、火災などでビルの高層階に取り残された人の救助や、高所からの放水活動などを行う。



高規格救急車

事故で負傷した方や急に病気になった方を医療機関に搬送するため、さまざまな症状に対応した応急処置を行うための高度な救急資機材を搭載している。



支援車

大規模な災害などに備え総務省により全国に配備された緊急消防援助隊に出場する車両で、東日本大震災、熊本地震に緊急消防援助隊として出場。災害現場での長期間の滞在を支援するための物資を積載、装備している。



支え合うことの大切さ

消防活動は、市内のみにとどまらず、熊本地震など、国内での大規模災害発生時には、災害支援として緊急消防援助隊を編成し、現地へ赴き、どんなに過酷な状況にも負けない強い気持ちを胸に救助活動を展開する。一人でも多くの人を救いたいという思いは全国の消防士、誰もが同じ。

そのために、県や市町村という枠さえも越えて支え合う。それが消防士の優しさで強さだ。



▲被災地支援に駆け付けた消防車両



▲現地における救助活動



▲水引小学校児童の西部消防署見学

さらには、将来、地域の防火活動の担い手となる子どもたちの防火教育のため、消防庁舎での社会科見学や5つの災害体験が可能な防災研修センターを利用した「初期消火選手権」なども実施した。
このように消防局は、日々の業務だけでなく、地域や子どもたちに密接に関わり、時には防災の大切さを伝え、時には一緒に防災を考えているのだ。



▲少年消防クラブ研修会



▲初期消火選手権に挑む子どもたち



▲はしご車体験搭乗



隊員たちそれぞれの思い

救急救命士として

地元に恩返しを

近藤 あすか

中 学生の時に女性救急救命士の活躍を紹介するテレビ番組を見て私もなりたいたと強く感じ、今の職に就きました。

現場では女性だからといって特別扱いはされません。同じように期待をかけられることをうれしく思います。筋力や体力では男性に及ばない点もありますが、女性や子どもの患者さんに話しやすい気遣いができるように日々任務に当たっています。

地元の方からの励みや、消防署見学での女子小学生の「お姉さんのように救急車に乗り、人を助ける人になりたい」などの言葉が、くじけそうになる自分に勇気を与えてくれます。感謝の気持ちを持ち、救命士活動で地元之恩返しをしていくことが私の使命です。



地に足着けて

日々の積み重ねを大切に

上川 勝文

人の役に立ちたい、地元へ貢献したい。そんな思いから消防隊員の道を選びました。活動する上で大切にしている言葉は「地に足着けて」かつて所属した川内高校男子バスケットボール部のチームスローガン。日々の鍛錬など当たり前の事を積み重ね、当たり前前にできることが活動する上で最も大切だと考えています。

我々レスキュー隊員は、火災・災害・事故の現場において最初に突入する部隊です。それだけに厳しい現状を見ることもありますが、要救助者を無事に救助できたときの喜びは大きいです。

2年前、宮城県仙台市であった救助技術全国大会の開会式で、地元の中生たちから東日本大震災での救援活動を行った事への感謝の言葉がありました。大変な思いをしたはずの彼らが、私たちを気遣う言葉を掛けてくれたことに涙が止まりませんでした。今後も先輩方の指導を仰ぎ、後輩たちを指導し、多くの人命を救えるよう、さらに日々の訓練に励んでいきます。



訓練に終わりは無い

中村 亮平

潜 水士になったのは、先輩の勧めと自分でも興味があったから。

訓練は、市内のプールや川、海で行います。潜水士の活動は、バディと呼ばれる「相手」と行動を共にします。

訓練の中に「バディブリーディング」というメニューがありますが、これは緊急時を想定し、水中で一つの空気ボンベを使用し、バディと交互に呼吸を行うものです。相棒との意思の伝達が合わないとうまくいきません。

消防学校時代に教わった「訓練に終わりは無い」という言葉。毎日の訓練は、どれだけやっても完璧ということはなく、継続していくことに意味があると思っています。いかなる場面でも最高の行動ができるように日々、努力を重ねていきます。



消防の現状と課題



消防局長 新盛 和久

現状

救急件数は年々増加しています。昨年は、過去2番目に多い4330件で、そのうち57%は、「急病に分類されるものでした。また、高齢者の搬送が全体の66%で、今後も高齢化が進み、救急件数・高齢者搬送件数は増加すると予想されます。

一方、昨年の火災件数は、35件と市町村合併以降では最も少なく、今年も少ない状況です。

火災が数件連続すると、防災行政無線や消防車で広報しますが、市民の方が「火災予防」の気持ちを持つことで、火災の発生件数は減少します。防火管理協会や危険物安全協会、防火クラブ委員会の啓発活動も火災予防に大きく寄与しています。

課題と対策

人口減少が進む中で、消防団員を含む消防体制の確保が挙げられます。

消防団は「地域密着性」「動員力」が大きな武器ですが、団員が確保できないことは、地域防災力の低下につながります。昨今、全国各地で豪雨、台風、地震など自然災害が多発していますので、消防団員の確保は喫緊の課題です。

この課題解決のため、大規模災害時のみ、大災害時消防団員、予防活動消防団員など、ある特定の任務を遂行する「機能別消防団員」の創設を進めています。多くの若者に崇高な消防団活動を知ってもらい、一人でも多くの方に参加していただくことで、「ふるさと薩摩川内市」の防災力は高まり、市民の「安全・安心」に直結すると考えています。

消防団という組織



前述にもあるとおり、現場で活躍するのは、なにも消防士だけではない。各地域に組織されている消防団員がそれだ。

彼らは、普段はそれぞれの仕事をしながら、火災や災害が発生した際には、活動服に身を包み、出場する。

市内には、中央・西部・東部・上甕・下甕の5つの大隊があり、その下に9つの方面隊と32の分団がある。また、団本部女性分団を含めると合計33の分団が存在している。

消防団の活動は、火事現場だけでなく、行方不明者の捜索やパトロール、火災予防の広報活動など多岐にわたり、誰よりもその地域に精通し、地域の見守り役としても非常に重要な任を負っているのだ。

必要なのはみんなを守るという意識

私たちは、消防局や消防団により、守られていることを忘れてはならない。

だが、同時に「自分の身は自分で守る」という意識も忘れてはならない。

災害発生時に必要なことは、「自助」「共助」「公助」の3つだと言われている。

「自助」とは、自分の命は自分で守ること。

「共助」とは、自分たちの地域は自分たちで守ること。

「公助」とは、国・県・市町村などの行政が主体となって、災害に強いまちをつくることだ。

通信指令は

先入観を持たず冷静に

上村 幸司



緊 急通報の際には、相手からの言葉を受取り、冷静に言葉を引き出す接し方が必要です。専門的には「オープン・クエスチョン」といって、通報者が自由に考えて答えられるよう質問を投げ掛ける手法。通報者の顔は電話越しに見ることはできなくても、周囲の音や声をもとに、救急隊が駆け付けるまでにできる最善の処置を考えます。

連携がうまくかみ合い、救助が成功したとき通報者から感謝の言葉が届く。それが最もうれしい瞬間です。

通信指令員として、これからも多くの方を救うべく現場に向かう消防団員にベストな活動ができる情報提供を行えるよう、助けを求め窓口としてこれからも技術の向上に努めていきます。

一番大事なことは、まずは自分の身を守ること。

そして自分の安全を確保した人たちの助け合いが大きな力になる。

災害からの被害を最小限に抑えるためには、災害が起きる前の普段から「自助」「共助」「公助」の考えの下、みんなで防災活動に取り組むことが何より大切だ。その時のために、普段から備えておくこと、避難行動を確認しておくこと、そして、自主防災組織や消防団などの防災活動に積極的にみんな参加をすることを心掛けていきたい。

地域を守りたい、愛する家族を守りたい。

立場は違っても思いは同じ。私たちは、共に手と手を取り合って、このまちを守るためにできることをこれからも一緒に考えていきたい。



かんたん野菜カレー



あらきさだお
荒木貞夫さん

私の Food 記

薩摩川内風土記

荒木商事株式会社の代表取締役会長の荒木貞夫さんは、社員の皆さんと交流し、日頃の疲れを癒してほしいと、以前から折を見てバーベキューを開催していました。昨年、8月31日(野菜の日)に野菜を食べる市の取り組みを知り、「野菜をたくさん食べるならカレーだ」と思い、昨年からみんなが集うバーベキューの場で、誰でも簡単に短時間で作れる「かんたん野菜カレー」を自ら料理し、振る舞っています。「社員とみんなでおいしいごはんを食べながら交流できるのが楽しい」と荒木さん。カレーは甘口と辛

口の2種類。どちらを食べるかで会話が弾み、さらにカレー作りに関するアイデアが出てきたりもします。こだわりは、コクを出すためにブイヨンを入れることです。昔から料理が大好きで、子どもの頃に両親にうどんを作ってあげたり、自分が親になってからは子どもたちにカレーや手巻き寿司などを作ったりしていました。普段から料理関係のテレビ番組を見たり、飲食店の料理などから調理方法を学んだりしています。みんなに野菜をたくさん食べて元気になってほしいと、真心を込めて作った一品です。

ワンポイントアドバイス

香りの強いカレーに野菜を加えることで野菜特有の青臭さや苦みなどが和らぎ、野菜嫌いな子どもでも食べやすくなります。いろいろな野菜を入れてみましょう。



レシピ

【材料】(4人分)
ナス：2本、パプリカ(赤)：2個、ズッキーニ：2本、ニンニク：1片、赤唐辛子：2本、ミートソース：400g、ブイヨン：600ml、カレー粉：大さじ2、オリーブオイル：大さじ1、塩：少々、こしょう：少々

【作り方】
①ナスは皮をむき乱切りに、パプリカ、ズッキーニを食べやすい一口サイズに切る。
②フライパンにオリーブオイル、みじん切りにしたニンニク、赤唐辛子を入れて弱火にかけ、香りが立ってきたら①の野菜を入れて中火で炒める。
③ミートソース・ブイヨン・カレー粉を入れて、約3分煮る。
④塩、こしょうで味を調える。

*甘口・辛口はカレー粉の量で調節しています。

本市では、野菜を1日350g食べることを推進する「薩摩川内市350ベジライフ宣言」を実施しています。



第5回 キジカケル 突撃レポート!

~防災研修センターに突入編~

今回は、消防局防災研修センターを調査することにしました。いざ!キジカケル!
防災研修センターは、災害から身を守るための知識や行動力を身に付け、防災意識を向上させることを目的に設立されたもので、無料で災害体験などができる県内初の施設です。中央消防署の1階にあり、防災グッズの展示や5つの体験コーナーがあります。ちょうど鹿児島島心女子大学生が体験しているところに遭遇したので、一緒に体験させてもらいました。

暴風雨体験

▲最大風速30m/s、最大降水量150mm/hの中で、台風などのニュースでよく目にする、雨がっぱを着ながら暴風雨に打たれる体験ができます。今回は暴風を体験してきましたが、前を向いていただけませんでした。

初期消火体験



▲水消火器を使って消火活動を行います。
①黄色の安全ピンを引き抜く②ホースを火元の方向に向ける③レバーを強く握って噴射

地震体験



▶阪神淡路大震災(最大震度7)、鹿児島県西北部地震(最大震度5強)など実際にあった地震を体験することができます。バーをつかんでいないと立っていることもできません。

煙体験



▼約15mの通路(実際は真っ暗)を進みながら、煙の中を避難する体験ができます。実際の避難では煙を吸うと一酸化炭素中毒などで意識を失ってしまう危険性があります。体験では吸っても安全な煙を使用していますが、なるべく煙を吸わないようにゴールを目指します。

皆さんが知りたいことや紹介したいことなどがあつたら、情報をお寄せください。キジカケルが取材に伺います。
問合せ先/本庁広報室 広聴広報グループ(内線632)
消防局予防課 (22)0135
申込・問合せ先/開館時間/9時~17時 *月曜日は休館 *入館無料 *入館無料

その他にも、119番通報を体験できるコーナーもあります。子どもから大人まで年齢など関係なく利用することができます。体験した大学生は「事前に体験しておくことで、実際に災害にあつたとしても落ち着いて行動できることもあるかもしれない」と語っていました。みんなも災害に備えて体験・学習してみましよう。